

授業方法について独自に工夫していること

導入では、プレゼンを用いて、前回の復習を端的にまとめた形で整理を行っています。
展開は、本講義に関しては、一人一人に模擬授業(15分)をさせました。その後、30分間の協議会をグループ毎でさせました。最後に、各グループで話し合ったことをシェアリングしました。

図画工作科の理念と実技力のバランス良い育成(=実践力)のため、「体験、講義、制作実技、指導案作成」の4つのパターンで、図工の全領域についてそれぞれ学ぶ授業構成を行っている。

- ・【体験】教員が行う模擬授業を体験し、その領域の内容を直感としておさえる
- ・【講義】直感的におさえたものを、領域ごとの目標や内容と照らし、根本的な概念(理念)の習得のため、講義を行う
- ・【制作実技】理念を大方おさえ、参考作品づくりに取り組み、子どもと教師の両視点から教材について考えを深める
- ・【指導案作成】実践的な授業を想定した略案作成を通して、教材と授業と指導事項を結び付ける力を見につける

他専攻の学生が対象の授業であることから、まず教科の内容に興味を持って取り組んでもらえるように努力している。

第一に、最初の教科教育科目ということで、授業実践記録から、イメージ豊かに実践を読み取るのが難しいようなので、まずは実践記録を台本に5人グループで、教師・子ども役を決めて、授業をやってみて、検討するようにしている。

第二に、授業実践例や教材を用意し、いろいろな見方・考え方と出会ったり、矛盾や葛藤、論争点を明確にして粘り強く討論ができたりするように考えている。特に、対立点を明確にしつつ、それを超えて教授・学習のイメージが膨らみ、見方づくりにつながるようにしたいと考えている。

水泳は能力差が大きく、好き嫌いの差が大きい種目特性はあるが、その理由や水泳の指導方法の体系的な考え方を初回授業で講義し、自ら創造できるように次回からの実技を実施している。特に安全面について、細かく指導を行っている。

絵を描くことに自信を持っていない学生が多いことを踏まえて、描き方をきちんと教えてもらえれば自分でも描けるということを体験させるように努めている。自分が描けないような絵を学校現場で子どもたちに教えられる筈がないので、道具の置き方や物の見方、描き方を教えている。小学校図画工作科における題材数は、小1～6を合算すると、決して少なくない数になるため、時間をかけて少しのテーマを扱うのではなく、15回の授業の中で10のテーマについて学生たちが描き方と教え方が学べるように、理論を踏まえつつ授業を行っている。出欠は毎回の作品提出でチェックできる。また、学生たちは自身の絵の具を持参させると、小学校の児童たちと同様にパレットに僅かな絵の具しか出さず、それが絵を描くうえで失敗の原因につながりやすいため、授業者が絵の具と画用紙を持参して、好きなだけ使えるように配慮している。

おおよそ毎時間、ワークシートを用意し、思考を促すように課題を与えている。

全体一斉指導とグループ学習を取り入れ、学習成果をグループ発表形式で実施している。

これらの授業は、小中学校の音楽科授業を行うために必要な知識と技術を身に付けるものであるが、音楽科授業の枠内に止まることなく、広く学校内音楽活動(合唱コンクールや学習発表会、音楽系部活動等)や一般の音楽教育(お稽ごとや一般音楽団体等)に関わる事柄に興味関心を抱かせるように工夫したつもりである。さらに、音や音楽に関する人間行動や発達に関する見識を持つよう、授業内容を考慮したつもりである。概ね、受講者には受け入れてもらえた判断しているが、「難易度が難しすぎる」「授業回数が少なすぎる(実際は授業回数を確保している)」「授業内容が多すぎる」「授業時間が短すぎる(実際は時間前に終わったことは無い)」と回答した者が1~2名いたことから、「難易度を落とす、内容を簡単なものにする、課題の量を減らす」等を検討している。しかし安易な方向へ合わせていくことに疑問を感じている。

独自の工夫かどうかは分かりませんが…

学校における授業実践場面のVTRを用いて、理論的な説明と実践場面の具体を関連付けています。毎時間にミニレポートと称して、学生個人の理解と解釈、質問、授業批評を自由記述で書いてもらっています。そのコメントに対して毎回朱書きで回答したり、授業のトピックとして取り入れたりしています。研究室アドレスを積極的に提示し、質問や意見を随時受け付けるようにしています。これは卒業後のアフタケアとしても連絡可と説明し、教師になった時、現場で困ったことがあった場合、自分を頼ることができると伝えています。(卒業生から年に何回かはメールが入ります。)

体育実技のため、まずは動いてそこから考えるような工夫を行った。

- ・授業内容を理解する上で一定の予備知識が必要な場合は、その知識習得のために少なくとも1回程度の授業時間を充てることとしている。
- ・プロジェクターを使用して授業を進めているため、ノート・テイキングの時間が余裕をもってとれるよう前もってプロジェクター資料をプリントとして配布している。
- ・家庭科を専門としない学生でも内容が理解できるように、可能な限り一回当たりの授業内容の量をしぼっている。

- ・3講座とも教育実習に行く前の授業でしたので、教師になるという前提で、現場に即した講義を行いました。
- ・講義方式だけでなく、教育現場での学び方を伝え、話し合い活動を多く取り入れました。
- ・学生さんたちが、自らも学んでほしいと願い、視聴覚教材、実習、実験を多く取り入れました。

ピアノの個人レッスンを担当していて1人あたりの時間が短時間なので、効率よくレッスンができるように工夫している。まず初回の授業や各授業の冒頭に、演奏方法や曲についてのアドバイスを全体指導した上で、効率の良い個人レッスンをする様に心がけている。また授業では個人レッスン・個人練習だけではなく、互いのピアノレッスンを聴き合う時間を取って、学生同士が刺激を与え合う機会を作る工夫をしている。

学生それぞれに音楽性や演奏方法に個性があるため、演奏法や音楽を否定するばかりではなく、それを生かして伸ばす指導を目指している。

- ・理論を最初に説明し、それについての実技を取り入れていること。

- ・少人数による話し合い活動
- ・簡単な試作や試しがきをさせること

授業時間内にできるだけ幅広い数多くの技法を学ぶことができるように、平面的な制作と立体的な制作に分けるなど内容や説明する順序等を工夫している。

授業の始めに、教員自らが授業で扱う技法を使って実際に作品を作りながら、一つ一つの技法について制作のポイントや注意点を話すように心掛けている。

・毎回、ミニレポートを提出させ、学生の理解度や学びたいことを把握しようと考えた。また、ミニレポートに対する私からの見解を毎回書き、授業以外においても意見の交流ができるように努めた。
・体育科教育A・Bでは、次の①②③の順で反転的な授業に挑戦した。①学生に授業前までにYou Tubeにある文部科学省作成の「小学校体育デジタル教材」を視聴させ、「疑問点」を付箋に一つ書いてもってくる。②授業開始前にホワイトボードに貼って、その疑問を整理するところから授業が始まる。③その疑問をもとにグループで協議し発表する。④領域別の小学校運動教材資料を使って本時のまとめをする。
・体育科研究では、模擬授業を経験し、小学校体育の運動領域の理解を深めるようにした。

遅刻をしないよう指導している。作業は持ち帰らずに、授業時間内に終わらせるよう努力している。

人数が多いので6グループにわけて時間を指定しその他の時間は自由に練習できるようにしました。

ピアノを弾く経験の有無で大きく差がでる科目です。
初心者には基本的なこと、経験者にはより音楽的なことというように個々に応じた指導を心がけています。

ピアノを弾く経験の有無で差が出やすい科目です。
ピアノ初心者には、簡単に弾けるように音を少なくする弾き方を指導しています。

毎時間レジュメと資料を作成し、それに沿って授業を進めている。

初めて担当する授業だったので、まず受講生が退屈しないように心がけた。

最初の授業で、授業全体の内容がわかる資料を配付、また、毎時の小レポートの内容から、授業に対する批判(分析)箇所等を確認し、次の時間の授業に反映させる。

競技経験を活かした内容を、学生の視点で消化できるように工夫して臨んだ。

図画工作科研究A I の課題は自分の専門テキスタイルの内容から選択している。羊毛でフェルトメイキング技法、テーマはみなさんと相談して決めた。昔話やメルヘン10種類で10グループを作り立体造形のマスコットを各自で仕上げからステージで一緒に発表した。個人とグループの組み合わせで楽しくできた。
二つ目はうちわを粹に織をした。テーマは夏。作品の形が日本的で学生たちは一生懸命課題に取り組み達成感があると感じた。

学生が興味をもつような教材づくりを心がけ、プリント作成に工夫をしている。
また、実際に小学校や中学校で使われている教材をできるだけ多く紹介するようにしている。

本授業では、まず学生のみなさんが音楽を体験し、自分自身が音楽を感じてから、音楽の要素や仕組みを理論的にも理解できるような授業展開を工夫しました。その音楽体験を通して、指導者として授業をする際のアプローチの方法、授業の流れ、配慮の仕方、留意点にも気づくようにしました。体験の中で活動形態を全体、グループ、少人数、個人とねらいや内容によって変化させることや、音楽を感じるために動きを使った活動を取り入れることの意義も感じてもらえるようにしました。そして、音楽という科目の特徴や柔軟性を知り、他教科との連携や学校生活全体への取り組みにも音楽が幅広く応用できる可能性を知ること、現場での実践に役立ててもらいたいと考えました。

できるだけ実技(歌唱・器楽演奏など)をとりいれる。アンサンブルの機会を増やし、学生同士のコミュニケーションに役立たせる。

- ・実際の教育現場で使用している資料などを提示したり活用したりしている。
- ・実際の授業で使用する内容から選択し、具体的な活動を通して指導法を身につけることができるようにしている。
- ・低学年指導では、教育現場で即実施できるよう、体験的に学ぶことを意識的に行っている。
- ・小学校6年間を見据えて、各項目を段階や系統を意識した内容にしている。

ピアノの経験者と非経験者の差が大きく出る科目である。非経験者には技術的に複雑でない曲、経験者にはそれ相応の曲を指定するなどしている。時間に余裕があれば、手首の位置や簡単にグランドピアノの構造を説明し、注意すべき左右のテクニックや音量の違い、聞こえてくる音のバランスの大切さについても説明するようにしている。

一方的な講義だけでなく、資料から読み取れることを考えさせたり、4~5人のグループで話し合いをし発表する機会をできるだけ作った。グループの話し合いによって、忘れていたことを思い出したり、自分とは違う発想に感心したという意見があった。

授業で取り上げない資料も含めて提示し、予習時に得られる情報の多様性に配慮している。課題などの計画を初回授業ですべて公開し、学生自身で学習時間の計画が立てられるよう配慮している。

技術科の授業づくりをテーマとした授業である。活動的学ぶオリジナル教材の標準的授業展開を実演した後、その授業を学生が自分なりに改善して模擬授業で確かめて、学び合うという一連の展開にすることで、授業における目標の明瞭化、授業構成の明瞭化、具体的な発問の効果など、指導法の要部分への考察が集中しやすいように工夫した。

今回出された成績について

授業の難易度の中で、約半数の学生が「難しい」と考えていたことが分かりました。指導案づくりがメインだったので、模擬授業に入る前に、もう少し指導案づくりのノウハウを伝える必要があると思いました。

一方、週あたりの学習時間は、1～2時間であった学生が8割いました。こちらの想定通りだったので、安心しました。また、教員の話し方や説明の仕方も、概ね満足をしてもらったので、これからも、その姿勢を大切にしていきたいと思いました。

上記の第一の工夫の模擬授業について、教科内容・教材、方法の理論について、グループでかなりの差がでてしまった。深く議論していけるグループと、そうでないグループがある。全体の討論で、共有できるように試みたが、なかなかうまくいかなかった。

第二の議論については、上記の差のために、全体討論が難しかった。また、違いを明確にしたいくない同調主義の傾向があるのか、対立点を明らかにすること自体が敬遠されるようでもあり、対立点や論争点を明確にするのが難しく、深めたり、共有したりが難しかった。

出席回数、つまり提出作品数、及び作品自体のクオリティで成績を判定するのであるが、通常のレベルで8点、それよりも良いと9点、授業者と同等またはそれ以上だと10点、また通常より低いレベルは7点、授業をきちんと聞いていない(指示通りに描けていない)ときは6点を与えて、最終的に100点満点としている。今回提出した成績は、その数字のままであるが、概ねAが半分、Bが半分という結果であった。中にはあと1点で上位のランク(S、A、B)になる筈であった学生もいるが、成績は厳粛なものとして扱わなければならないという考えを貫いた。

教員として勤務する場合、あるいは音楽家として演奏活動に従事する場合、いずれも遅刻と欠席は許されないことから、「出席点」を特に重視して成績評価をつけるようにしている。さらに、「知っている／知らなかった」等の大学入学以前に身に付けた知識の多寡や「できる／できない」等の技能ではなく、授業を通じて身に付けた知識や技能の「伸びしろ」を重視して成績評価をつけるようしている。そのため、欠席ゼロで課題をクリアした学生には授業態度に問題の無い限りA評価を出すようにしている。結果として、A評価が大半を占め、受講者の割合によって評価を調整する相対評価ではなく、絶対評価で成績評価を判定することになる。実技を含む技能系教科では、相対的な評価は意味をなさないと考える。

- ・出席
- ・授業態度、積極性
- ・実技テスト
- ・レポート

これらを点数化し、総合評価とした

・教員に対してどのようなことを望んでいるのか把握し、将来教職に就く人たちに教科教育を教えること的前提は崩さず、相手に合わせて伝えていきます。
教員の資質向上に役立てたら、幸いです。

ピアノ学習において初心者の学生は、練習時間をたくさん取ってもなかなか上手く弾けないと苦労していた様子だが、初心者同士で集まって練習したり片手でゆっくり練習したりして、何とか課題をクリアして感心した。

ピアノの経験がある学生も決して手を抜かずに丁寧に曲と向かいあってレッスンしている姿が見られて良かった。

音楽を聴いて評価をするのはとても心苦しい部分もあるが、学生ひとりひとりの個性や音楽性とまっすぐに向き合って評価できた。

実技の評価をも含め、まとめのテストも実施し、すべてを勘案して成績を出している。エビデンスを問われても答えられるようにしている。

授業時に制作等に熱心に取り組む受講生が多く、また授業以外にも教室に来て制作する受講生が多かったこと、さらに提出物の内容がとても良かったことから、全体的に評価が高くなった。

・「学生に授業前までにYou Tubeにある文部科学省作成の「小学校体育デジタル教材」を視聴させ、「疑問点」を付箋に一つ書いてもってくる。」ことを期待したが、実際は授業直前にYou Tubeにある文部科学省作成の「小学校体育デジタル教材」を視聴して慌てて付箋を貼って授業を始めることが多かった。視聴する観点を提示したり、他の運動教材を考えるような課題の設定をしたりするなど、ただ視聴させるだけではない仕掛けが必要であったと考える。
・小学校体育の運動領域では現在、教科用図書が存在しない。そのため、補助資料(小学校体育の全運動教材をまとめたもの)や具体的な授業映像が学生の小学校体育に対する理解やイメージづくりにつながっていると考える。

課題はきちんと修得できていると評価できたが、出席回数2/3を満たしていない場合、ピアノを長期間習っていて高い技術をもっているにもかかわらず明らかに練習をしないで授業に臨み容易な曲を選択して課題をこなした場合など、修得技術の結果の評価が高いが授業態度に意欲が認められない学生の成績評価に苦慮しました。

ピアノを弾いたことのない学生の努力を成績に反映できるように考えました。
弾く曲の完成度だけでなく、曲数や弾く曲の難易度も考慮しました。

学生がよく努力し、まじめに練習してくれたので良い評価の学生が多かったと思います。

成績は作品の出来栄え、授業態度と出席によって決めた。

授業態度もまじめで、努力をしている学生には高い評価をして、授業態度があまり芳しくない努力が感じられない学生には評価を低くし、学生が自分自身を振り返り納得のいく成績をつけるように努めている。

(2)で述べたようにまずは自分自身が体験することを第一に考えていますので、授業に出席して音楽に触れて感じることを、様々な音楽活動に意欲的に取り組むことを重視しました。そしてその体験から得たものや感じたことを言葉で表現した提出物も合わせて重視しました。試験では、授業で学んだ基礎的なことや、この授業を受講したまとめになるように、また改めて自分を振り返るきっかけになるように出題しました。それらを総合して成績といたしました。

出席回数、授業態度を重視。

・指導要領の理解と必要最低限覚えておきたい事項、指導者として必要な種々の実技の習得をみた。また、得意不得意ではなく、積極的に取り組む姿勢を大切にた。

多くの学生が非常によく努力していたと思う。ピアノの練習が好きか嫌い、嫌いでも努力するかどうかということで曲の完成度が違ったものになってくる。総合的に判断し成績を出した。

平均点から考えれば、中庸な評定であったと思う。

最初の確認テストで合格ラインに達した学生が4割程度であったため、問いかけ方をかえたテストすることでその後の確認テストでの達成状況があがった。成績の現実からすれば、学生アンケートのちょうどよい評価は少し甘いように思われる。

アンケート結果を受けて改善したいところ

教員とのコミュニケーションの取り方では、「強くそう思う」が4人でした。次回以降は、もっとコミュニケーションを取るように努めたいと強く感じました。

今回の結果は、授業において収穫がなかった1名に、授業中に担当教員が気付けなかったことがそもそも問題であるとする。コメント用紙や授業中のコミュニケーションをさらに活性化し、まずはつまづいている学生に気付くことを先決としたい。

これまでも改善に努めてきたが、今後さらに努力したい。

上記の(3)は、アンケート結果に反映されている。特に、教員が学生から出なかった見方や違う立場から意見を出すことに抵抗があり、誘導や強制とみられてしまう。以前は、この授業の前の教材研究科目で、教員からの伝達ではなく、学び手自身が追究し、またそれについて議論して授業をつくるイメージとその意味を実践しなら共有し、その後、そのような授業記録の分析を行っていたせいか、うまくいっていた。今回、授業づくり・単元づくりに重きを置いたが、授業実践例から、「課題提起型学習」あるいはディープ・アクティブラーニングを検討できるためには、その体験があまりない学生には、その前にテーマについて学生が追究し、それを持ち寄り、論争点を発見し、検討するなどといった活動を最初に行い、その意味を体験により実感する必要があるようである。そのような活動を積極的に入れることにしたい。また、やっていることの意味を、丁寧に繰り返し、説明するようにしたい。

資料の提示や自らが調べる課題などを与えたいと思う。

問1から10のうち、①と②を併せた回答から判断すると、問1、問5、問6、問7、問8については今後、特に改善に努める必要ななさそうである。問2「授業で提示された課題・参考文献・資料などを自ら検索・参照した上で、自分で問題点を深く考えた。さらに、その考えに基づき行動した。」や、問3「授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した。さらにその思考に基づき行動した。」では、③④と答えた学生も少なくないことから、今後、自発的な学習につながっていくような授業構成をしないといけないと思った。問4、問9、問10では①と②と回答した学生が60%を超えるが、③と答えた学生も20～30%いたことを踏まえて、より自信を持って児童の前で授業ができるような工夫や、学生一人一人とのコミュニケーション、教育目標の明確化にもう少し尽力しなくてはと思う。

毎時間、予習のための課題を与えるとよいだろう。

授業内容の難易度をもう少し上げた方がよいだろう。

前述したとおり、授業内容の「難易度を落とす、内容を簡単なものにする、課題の量を減らす」等を検討している。しかし教員免許に関わる授業において、学生からのアンケート結果を受けて安易で平易な方向へ合わせていくことには強く疑問を感じている。

アンケート結果に関わらず、来年度から「アクティブラーニング」の大幅な導入を考えております。今のところ、教員側がin-putすべき内容とそのための時間計画、学生側がout-putする内容とそのための時間計画と方法(主としてグループ協議)を検討し、具体的なアイデアが固まりつつあるところです。

- ・板書は見やすいように工夫する必要がある
- ・自ら問題意識を持てるような機会を設ける必要がある

授業で得た知識・技能を各自が深め展開できるような指導が必要ではないかと考えている。

・教職に就きたいという意識の高い学生さんたちには、とてもよい評価をしていただきました。教材研究をし、学生さんの授業のふり返しには丁寧に朱書きを入れました。「将来、真似をしたい」といつてくれた人もいて、うれしかったです。
・専門外の興味をもっていない学生さんには、もっと興味をもてるよう、時間配分等にも気を配っていきたいです。
・ノートテイクを受けている学生さんのいる一講座の人たちは、いろいろな教科の寄せ集め集団でした。なぜ教員がゆっくり話しているのか、最初に他教科の人たちには説明をきちんとしておくべきでした。現場には、いろいろなハンディキャップをもった子どもたちがいます。そういう子どもたちにも、心配りのできる教員になってほしいと願っています。
・後期の人たちには、最初に何を学びたいと思っているのか、さらにきちんと実態把握をして授業を組み立てていきます。

授業の難易度について難しいと感じている学生が2割程度だったので、個人に合わせた課題を出す上でもう少し取り組み易い課題も出すように次回から工夫したい。
この授業のための週当たりの学習時間が1時間未満と回答した学生が一番多かったが、ピアノの学習はコツコツと毎日の積み重ねをして、もっと累積時間が多くなるようにしたい。そのために次回からは課題の出し方を工夫して、継続しやすい練習方法の提示をしていきたい。

学生さんのアンケート結果から、授業内容、説明方法等はおおむね良好と感じた。その結果、知識・技能が身につく、多様な考え方ができるようになったと一定の評価ももらえたが、本授業のために家庭学習や自主学習をする時間がすくなかったという結果が出たので、今後担当する機会があれば、その点を改良していきたい。

・これまでも増して学生の思いや考えを活動の中に取り入れていくことが大切

受講生自らが調べたり、新たな思考を展開させたりする部分が少ないことから、この点を改善したい。

・問3「授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した。さらにその思考に基づき行動した。」の割合が他の項目に比べて少ない。反転的な授業を試みたが、文部科学省作成の「小学校体育デジタル教材」を視聴する観点を提示したり、他の運動教材を考えるような課題の設定をしたりすることで改善を図り、学生のアクティブラーニングにつながるように努めていきたい。
・問4「授業で修得したことがらについて、自らの表現で伝えることができる」の割合も他の項目に比べて少ない。資料の説明と比べてグループ協議し発表する時間的な確保ができなかったと反省する。ペアからグループへ、グループから全体へなど、学生自らの表現で伝えることができる時間的確保と学習形態の工夫もしていきたい。

楽譜の読み方もわからない初心者に対して説明指導する時間が必要なので改善します。

同じテキストを使っている、クラスにより、難しいと考える学生が多いクラスもあります。ピアノの初心者が多いクラスでは指導方法の工夫、改善にとりくみたいです。

難しいと感じる学生がいます。ピアノ初心者かと思えます。
個人差が大きい学生のレベルに対応できるように課題を工夫、改善していきたいです。

学生により分かり易い説明を心掛けたい。
学生の主体的な活動をより重視したい。

実技の授業を担当していると感じることではあるが、①この授業で身につけるべきことは何か、これを最初の授業で細かく説明する必要があると感じた。次年度はこの点をはっきりさせて授業を進めるつもりである。②授業で説明する要点を忘れないように記録できる時間を確保する。内容は大きく変わることはないが、以上の2点を次年度では注意して授業を行っていききたい。

週当たりの学習時間について、半数はなしの回答であった。次の時間までの課題設定を特にせず、当日の授業のなかで学習する形式で行っていることがほとんどのため、このような結果になっていることも考えられる。とは言え、週間の学習時間を促すような授業内容の工夫は必要と思われる。

「この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた」について「強くそう思う」と「ややそう思う」合わせて約9割の回答が得られたこと、「授業の難易度」について「ちょうどよい」78%・「難しい」15%の回答が得られたことから、教員の意図と学生の学びが概ね噛み合ったと理解している。現在の授業の方向性を洗練させて、より学生の学習意欲を喚起できるように工夫を重ねたい。

改善する余地は毎回あり、少しずつ欠席する学生の数を減らすことができればと思います。

声小さいときがあるということなので、今後はできるだけ大きな声で講義をするように努めていきたい。

授業内ではみなさん意欲的に取り組んでくださっていましたが、他の場面で音楽教育について考えたり、調べたりする面が少なかったようなので、今後は自分でさらに思考や理解を深めてもらえるような工夫やアドバイスを取り入れた授業を試みようと思います。

しゃべり方、説明の仕方を工夫し、授業の難易度で、難しいと答える学生を減らしていきたい。

- ・小テストなどにより、段階的に理解の様子をみて事後に生かしていきたい。
- ・学生が自ら考え学ぶことができるような内容を考えていきたい。

本来ピアノのレッスンとは非常に多くの時間を必要とするものである。短い時間のなかで多くの人数の演奏を聴き、大きな進歩が得られるよう導いていくことは困難な作業である。しかし、これからも今までと変わらず、学生がこの授業が終わってもピアノに触れていきたいと思うよう努力していきたい。

毎回の授業のはじめに、授業のねらいを明確に伝え、終了時に、学生がねらいを理解したかどうかの振り返りをしたい。

授業後、さらに自学したくなる仕掛けを構築する必要があるだろう。

上記のことを含めて、授業が狙いについて理解をさらに向上させたい。